

人間科学へのアイデンティティー  
— 学際領域の知の共同体をめざして —

佐古順彦\* 竹中晃二\*\* 谷川章雄\* 根ヶ山光一\*\*\*  
野呂影勇\* 村岡功\*\* 門前進\* 山内兄人\*\*\*  
野嶋栄一郎\* (司会)

と き：1997年9月9日(火)

ところ：人間科学部第二会議室

スポーツ科学, 人間科学, 健康科学

野嶋(司会) この座談会は人間科学部創設10周年を記念に行われているもので、きょうはその第2回目に当たります。前は、この学部の設立に関与された先生方をお招きして、過去を振り返るような形でいろいろ忌憚なくお話ししていただきました。その速記録がお手元にありますが、これは先生方に既に一度お読みいただいたものと思うんですけれども、このあたりからきょうの座談会はスタートしたいと思います。

きょうは少し趣向を変えて、これからの人間科学部をになっていく先生方にお集まりいただきました。

今回のテーマは「人間科学へのアイデンティティー」としたいと思います。人間科学というものに対してそれぞれの先生方が別々の専門性を持ってとり組んでいらっしゃるわけですが、そのような先生方が人間科学に対してどのようなアイデンティティーを持っていらっしゃるのか、それぞれの人間科学観の差異性と共通性に配慮して議論を重ねていきたいと思います。

それで、リレー対談というわけではないんですけれども、前の座談会の結果を一応受ける形でどうか、これをある種のきっかけとしまして話を

展開させていきたいと思うんです。お読みになった感想とかをざっくばらんにおっしゃっていただけたらと思うんですけれども、山内先生、いかがでしょう。

山内 丁寧には読んでいないんですけれども、人間科学部をつくるときにご苦労されたんだということがよくわかりました。しかし、人間科学、または人間科学部をこういうものにしたといった理念的なものが知りたいと思いました。ここに移ってきたときにある先生から言われたことを思い出します。人間科学とは何でしょうかというような話のときだったと思うんですけれども、「それは若い人たちが考えるんだよ」と言われました。これは非常に無責任だと思いましたね(笑)。

野嶋(司会) 人間環境学部という構想が人間科学部構想より前にあって、浅井先生が書かれた「早稲田フォーラム」の人間科学部の紹介である「人間科学部の誕生」のところにそれに関する記述がありますが、そちらの方に理念が書かれているような気がします。学部そのものもそうなんですけれども、学科のコンセプトそのものも、今言ったような形で言う和我々自身になかなか伝わりにくいものがありましたよね。

前の座談会の速記録をみますと、スポーツ科学科の上田先生が、スポーツ科学イコール人間科学

\*人間健康科学科

\*\*スポーツ科学科

\*\*\*人間基礎科学科

だとおっしゃっている説がこの中に出てきますけれども、それに関連するというで何かご意見ございますでしょうか。そういう見解というのはスポーツ科学科の中に一般的にあるのでしょうか。

**村岡** 必ずしもそういうことはないと思うんですよね。ただ、僕自身の個人的なことで言えば、僕は16年ぐらい前ですか、教育学部に体育学専修というのがありましたので、そこに戻ってきたわけです。その戻ってくるころか戻ってきてからかはっきりはしませんが、将来的には、当然そっちの方に移ってもらうようになるよと、そういう話を伺っていたわけです。どうも学部が人間科学部だったか、体育スポーツ系学部だったか、わからないんですけども、多分その当時から人間科学部というような名前が出ていたような気がしますし、あるいは総合という言葉がついていたかもしれません。

それで、その中にスポーツ科学科という学科が入るんだという話だったものですから、僕はさすが早稲田だなという思いをすごく持ったんです。というのは、人間の特徴の一つでもあるスポーツ的な活動、あるいはスポーツというものを学部の柱になる一つの学科に据えて取り上げようとしていたところに、さすが早稲田だ、これはぜひ行ってそこで研究してみたいというか仕事してみたいという、そういう思いにとらわれたんですね。

ところが、これを読んでもそうですし、その後実際にいろいろ話を聞きますと、どうも何か付け足し的存在、あるいは人間科学科の中にスポーツ科学科が入ったのは妥協的な産物であって、必ずしもスポーツ科学科が人間科学科の中に必要だからといって入ってきたものではないというようなことが徐々に明らかになってきたわけです。つまり、人間環境学部だか、総合科学部だかがあって、一方で体育系スポーツ学部というのがあって、その両方2つをつくらうとしていたのがどうもうまくいかない、スポーツ系学部単独での創設というのは絶対的に無理であるということで、もう妥協の産物として一つにくっついちゃった。そういうことが徐々にわかってきて、最初の思いどおりの人間科学という中でスポーツ科学をやっていくんだという自分の気持ちというものもだんだん揺らい

でいって、今、果たして人間科学の中にスポーツ科学科が必要なかどうか僕自身疑問に思う部分もあります。それだったらいっそもう人間科学科とスポーツ科学科という2つに分かれちゃうとか、人間科学科とスポーツ科学科に分かれちゃうとか、むしろそういう方向の方がやりやすいのかなと、最近はそのように思うようになったんです。

**野嶋(司会)** 先生は人間科学的なスポーツ科学を理想とされていたということではないんですか。

**村岡** いや、すごいおもしろいなと思ったんですよ。それが具体的にどういう形で達成できるのか、自分の中でももちろんまだはっきりしたものがなくて漠然としたものだったんですけども、ただ、考え方としては非常におもしろいなと思ったわけです。あるいは、スポーツというものをある意味ではそれだけ認めてくれたというとおかしいですけども、それまでは、やっぱりスポーツという言葉そのものもそうですし、そういう活動そのものについてもかなり低く見られていた部分もありますし、アカデミックなものとはどうしてもとらえられない部分というのもありましたので、それが学部の一つの柱になるというところに非常におもしろいなと感じました。

**山内** つくった人たちの中にはいろいろな考えがあったかもしれませんが、人間科学部は、村岡先生が最初期待されていた方向にいているんじゃないかと僕は思っているんです。人間を考えると、ほかの動物と違ってスポーツをやったり、芸術活動をやったりする。そういった人間の特徴が人間科学部に入っていないならば、意味がないような気がするんです。だから、今、先生は分かれちゃった方がいいとおっしゃったけれども、ぜひむしろ最初の理想のままやっていただければ、人間科学部はさらによくならないかなと思います。将来を考えると、僕はむしろ芸術科学を入れる必要があると思っています。(笑)。

**野嶋(司会)** 現実に学生の定員なんかを見ても、ちょうど50%がスポーツ科学ですよ。ですからスポーツ科学というのは、この人間科学部で見ると半身がスポーツ科学みたいところがあるから、先生がそういうふうにおっしゃるのを僕はちょっとびっくりしたんですけども、むしろ現

在の人間科学部というのはスポーツ科学の全盛時代で、基礎科学科とか健康科学科というのはそれに付け足していったような形であるような、そんなイメージも、逆に言うと私なんかは持っているようなところがあります。こういうのは余り司会の私が言わない方がいい(笑)。門前先生、いかがでしょうか。

**門前** 私は、前回の座談会の話の中でちょっとおもしろかったのが、この学科を考えるのに基礎研究、戦略研究、戦術研究という大島先生の言葉の部分ですね。戦略と戦術の区別は私の中でつかないのでちょっと教えてもらいたい気もするんですけども。それともう一つは、これも大島先生ですか。個についてのウエルフェアというのと集団、集団と個のウエルフェアの違い。それに対して相馬先生が、個が集まって集団になるんじゃないで、集団独自の集団というのがあるんだという、このあたりの雰囲気非常にこれを読んでいておもしろいなど。

そうするとそういう発想でいくと、先ほどのスポーツの話でいったときに、例えば健康科学科で吉村先生がソフトボールをやられている。あれはスポーツのオリンピック選手を育てるといふのと、そういう大衆的なスポーツですか、その関係が私にはわからないんですけど、そういう大衆的スポーツということ考えると、これは非常に集団的なそういう面が入っているだろうと考えられます。

**野嶋(司会)** 育てていくのは選手だけじゃないものね。つまり個の中に結実したものだけじゃなくてということですね。

**門前** ええ。今言ったオリンピック選手を育てるといふのと、それとの違いに関してわからないので、またいつかちょっと教えてほしいと思うんですけども。

**村岡** これは上田先生がそう思われているだけであって、スポーツ科学科の先生がすべてオリンピックで優勝する選手を育てるためにこの学科が存在しているんだという思いを持っているとは限らないですよ。

**野嶋(司会)** 強い選手を育てたいというのははっきりおっしゃっていますね。

**村岡** その思いはもちろん一方であることは事

実ですけどね。それともう一つは、当然のことながら、いわゆる一般の人たちの健康づくりということでのスポーツのあり方とか、そういったところを考えようというのも共通的に持っている部分だとは思いますが。上田先生の場合はちょっと極端に片方への思いが大き過ぎるんだろうと思います。

**野嶋(司会)** 確かに、前回の座談会では上田先生のお話しになっている部分が3分の1ぐらいになると思いますよ(笑)。

**佐古** 教育学部の体育学専修といったときにはやはり教職として、体育の教員を養成するという部分が強かったんじゃないですか。

**村岡** そうですね。

**佐古** ですから、それがスポーツ科学科として出てきたわけですから、やはり守備範囲というか、それは非常に広くなったんじゃないですかね。

**村岡** 教育学部の体育学専修の場合には、まさに教職というのが一番中心にありましてし、卒業すれば教員の免許状がほぼカリキュラム上も自動的に取れるというような、そんな形にもなっていました。ただ、学校体育という、教育の中の体育というとらえ方だけではもうどうにもならない時代になりつつあったんですよ。そういう状況をいち早く早稲田が感じ取ってというか、それをスポーツ科学という名称にかえたということは非常に先見性が高かった、そういう思いは持っていましたね。

**佐古** 実質的には教育学部系統の学部というのが改組改編になっちゃったわけですから、そういう意味では先取りじゃないですか。

**村岡** そうですね。

**野嶋(司会)** スポーツ科学というもの自体は、つまり学問分野としては最初からもうあったんですか。

**村岡** かなり古いようですね。多分、寒川先生が「早稲田フォーラム」の中にも書いていらっしゃると思いますけれども、これを見ますと随分前からドイツあたりで使われてきたような書き方をされていたと思うんですけども。

**野嶋(司会)** 先生方が研究をはじめられた当時は先生方の分野は、スポーツサイエンスとは呼ん

でいなかったんですか。

**村岡** 我々の学生のころはやっぱりまだそういう呼び方は一般的ではなかったですね。寒川先生を見ますと今世紀の30年代ということですから、60年か70年ぐらい前ですか。それが古いというのか新しいというのかわかりませんが、そのぐらいのところに出てきているようですね。

**野嶋(司会)** 前の座談会では、上田先生のお話の中に、私の知らない練成会とか、よくわからない怨念があるというふうに書かれていますけれども、つまりどこかで反発を買うようなイメージも持っているんでしょうかね。体育科学は、それを上田先生は繰り返し繰り返しおっしゃっていたところがあるんですけども。

**村岡** あったんじゃないですか。体育という言葉そのものにも多分そういう響きが残っていたんじゃないですね。

**野嶋(司会)** そういう意味ではスポーツサイエンスで、しかも人間科学部に固まったということは、そういうところを断ち切る意味ではよろしかったんじゃないですか。新しく飛躍する意味で。

**村岡** ええ、僕自身はそう思うんですよ。先ほど申し上げたようにすごく期待する部分もあったし、体育という枠にとどまらずにスポーツサイエンスというものができるといって、そういう雰囲気当然で上がってくるだろうしと思って、本当に喜んでこっちに来たということですよ。

**野嶋(司会)** さっきは分かれようとかなんとかおっしゃっていましたが、少くともスタート時点の思い入れは全然違うんですね。(笑)。

**野呂** 筑波が体育学系というのをつくりましたよね。あれにはかなり影響されたんでしょうか。

**村岡** 筑波大学は国立ですし、多分そのころに筑波が早稲田のような考えは持っていなかったとは思いますが、スポーツサイエンスという言葉を使おうとしても、もしかしたらうまくいかなかったかもしれませんね。やはり早稲田だからできたという部分があるのではないのでしょうか。

**野嶋(司会)** しかも基本的には設置審をクリアしているわけですから、人間科学との整合性は一応その辺の人たちも認めているわけですよ。しかも、特に早稲田の人間科学部の場合は半分ぐら

いの勢力をスポーツ科学が占めているというところが、非常に大きな学部の特徴ではないかと思えますね。そこに、健康科学科があって、基礎科学科があると。それらが出来てきたいきさつとか理念も前回の座談会の中で詳しくお聞きしたかったんですけど、残念ながらその機会を逸してしまっただけですが、これを当初は融合するというアイデアでいって、実際は設置審でだめだったといいきさつが語られています。この辺の問題が出てくると思うんですね。例えば村岡先生はそうやってスポーツ科学の学問をやっていたら、それが大体50%ぐらいの分野になる。それで、例えば人間科学としてほかの学科とリンクするとか、そういうようなことというのは具体的にはお考えになったことはありますか。

**村岡** 学科としてですか。

**野嶋(司会)** 学科としてというより個人としてでしょうか、これを読みますと、最初は何か授業自身を共通してみんなとれるようにするとか、そんなような構想だったみたいですね。

**村岡** ただ、僕自身の当初の頭の中にあっことは、自分は運動生理学というのを専門にしているわけですが、研究というような面で、いろんな分野の人が一つの研究に向かって共同しながら進めていく、そういう体制がとれるんじゃないかという期待があったんですよ。ですから、学科同士の融合というようなことは余り考えたことはなかったんですけども、自分の研究テーマに関してはそういう部分が期待できるんじゃないかという思いが強かったですね。

**野嶋(司会)** 竹中先生なんかは、そういう意味ではどうでしょう。

**竹中** 80何年当時というのはちょうど私は関西学院大学というところに勤めていまして、そこで関西学院も同じように校地問題で揺れていました。理事会が盛んにもめていたわけです。早稲田でも校地問題でもめていた。西は関西学院がもめていて、東は早稲田がもめているというような、そういう新聞論調があったんですね。私学というのは「しゃあないとこやな」と、私はいつもそういうふうには思っていました。そのときにまさか早稲田大学に来るなんてことは考えてもいませんでした

ので、スポーツ科学系のそういう大学ができるというのはいいことではあるけれども、私とは全然関係ないと思っていました。

それから、アメリカへ行かせてもらって、岡山大学の教育学部に移って、さらに、こっちに変わってきたんですけれども、岡山大学の教育学部は要するに学問のデパートメントなんですね。いろんな人がいっぱいおられて、私は人懐っこい部類に入ると思うので、それが幸いしているのかどうか知らないですけれども、自分のわからないことは余り遠慮なく聞きに行けた。非常に便利であったし、向こうもお互いに双方向に関係ができた。特に理科系の先生というのは遅くまで残っておもしろいことを考えたりしているので、うまく関係ができたんですね。そういう自由な雰囲気があったと思ったんですけれども、こっちに来てもしっかりメリットはそれだと思うんですね。

ただ、今ここへ来て、ちょっと人間関係が複雑であるというふうに最初思ったものですから、ちょっと人を見ながら付き合っていました。今はいろんな人にわからないことは正直に聞いて、そして教えていただける。そういうメリットはあると思うんですね。ただ、研究面でそういうインターディシプリーな仕事をやろうとするとつまづいてしまうというところはありますね。やっぱり自分の仕事をまずは一生懸命やって、そして何かテーマがあればそこにみんな食いついて、また離れていくという、そういうシンプルな学際的な研究の仕方をすれば、ここは私たちにとっても学生にとってもメリットのあるところじゃないかなと思います。

**野嶋(司会)** 上田先生の話ばかり引き合いに出して恐縮ですが、この速記録を読んでいますと、上田先生はこの学部をつくる時にスポーツ科学だけの学部をつくろうと思ったら、それ単独では反対が強くてできなかった。一方において医学部系の何かが必要だという声は多かった。それで、医学部は無理だけど、健康科学という形を提案されたということも述べられているんですね。そして頭に人間基礎科学科を持ってきた。これは春木先生のアイデアをかりたところがあった。上田先生のおっしゃることがすべてを語っているとは思

えないんですけれども、そういうところがあって、私は、もし当時の設立メンバーの先生方の中にもそういう発想があったとするならば、健康科学とスポーツ科学をすごく近いところと読んでいたんじゃないかなというふうに思うんですけれども。

**竹中** ちょっとおもしろい話があるんですが、私は岡山大学教育学部の生涯教育コースというところに属していたんですけれども、その際お会いする機会がありまして、ある国立大の体育の先生で設置審のメンバーの人がこう言われました。早稲田大学の人間科学部のスポーツ科学科は、あれは体育じゃないよ、全然異質のものだと。だから、結局その考えイコール文部省の考え方だと思いました。国立の物の考え方は縦割りですから、体育は体育、心理学は心理学と、こういうような物の考え方ですね。そこでやっぱりこの人間科学部というのは異質なものとして彼らはとらえていた。

だから、設立当初にこれだけ理念がいろいろあったとしても、ねじ曲げられて、ねじ曲げられて、やっとなおけーになったところには最初の理念が薄れてしまって、要するに最初の理念とカリキュラムの間の整合性が全くなくなってしまったというようなところがあると思うんですね。これは、10年前には健康科学という概念もなかったでしょうし、またスポーツ科学という物の考え方も体育の中にもなかった。それは仕方がないことだと思うんです。そうやってねじ曲げられてきた結果、非常に無理な形でもとにかく通して設置してもらったということが前提であったということが本当の話じゃないかなと思うんですね。だから、その当時のことをほじくり返したとしても余り前向きな話にはならないと思うんです。あとは我々がどうしていったらいいのかですね。

**野嶋(司会)** だから私が思うのは、つまりスポーツの先生方から、例えば健康科学へ触手を伸ばすというか、そういうような発想というか……。

**竹中** それは、私自身の専門が運動心理学とか健康スポーツ心理学をやっていますから、競技スポーツよりはむしろ一般の人のストレス・マネジメントとか、運動やスポーツをそういうものに使いたいわけです。そういう面では健康科学にも近いというふうに考えた方がいいかもしれないです

ね。

**村岡** 私がやっていることも健康科学と深くかかわっているんですが、ただ、この人間健康科学科というのはどうもやっぱり最初から心の健康という“心”という文字が上についているような、そういう印象があるんですね。そうすると、なかなか近よりがたいわけです。

**山内** 印象ではなくて、まさにそれをねらっていたわけでしょう。

**村岡** でしょうね。そうすると、僕はどっちかということの方の研究じゃないですか。そうするとなかなか近づけないという雰囲気があることはあるんですね。でも、そんなこと言ってもらえませんし、さっき申し上げたように心も体も一緒に、どうしたらより健康になっていくかというようなことを、基礎科学科の先生方も含めて考えていけたらなという気持ちは当然持っていますよね。

**野嶋(司会)** それで、健康の方に戻したいんですけども、今スポーツの体の話から心の話になって、実際問題私自身が健康科学科にいますけれども、非常にアイデンティティーを得るのが難しいところがありましてね。ざっくばらんに健康科学科の先生方にどんなふうに見えていらっしゃるかとか、あるいはどういうふうに変えたらいいだろうかとか、そんなようなことを述べていただけたらと思います。例えば谷川先生、いかがでしょう。

**谷川** 私は、自分がやっている考古学が健康科学なるものとは全く関係がないというふうに思っていますから(笑)。私がやっていることを健康科学にどうやってつなげていくかということを考えるのは断念しました。

先ほどの竹中先生のお話と重なるかもしれないんですけど、学部をつくるときの理念的なものというのは、浅井先生がお書きになったように、高度な技術社会の中で、あるいは情報化社会の中で人間性の回復、人間性の追求・探究というものだったんだと思うんですね。そうした理念を持つ人間科学部を構成する学科が人間基礎科学科と人間健康科学科、スポーツ科学科であると言われると、理念と学科の間をつなぐ言語が全然ないんですよ。それは設置審との対応の中でねじ曲がって

いったのかもしれない。ともかく、大目標はあるにもかかわらず、間がなくていきなり学科の構成が出てきちゃうから人間科学部自体が非常にわかりにくくなっていて、しかも、人間健康科学科の中に私のように健康科学と全く無縁な人間まで入っているということが現状であると思うんです。

**野嶋(司会)** 狭義に健康科学ということと言われると、多分上田先生の解釈などからいくと、私なんかがいること自身もおかしな話になっちゃってくるんですけどね。

**野呂** だけど、谷川先生のやっている仕事はかなり健康的でしょう(笑)。空気のいいところで土を掘ってね。だから、これからはレクリエーションの一つにああいう考古学みたいのが出てくる可能性もありますよ。

**谷川** もちろん考古学は生涯学習の中に入ってくる分野ではありますけれども、しかし、それは健康科学に入るんですか。

**野呂** さあ(笑)。

**谷川** だから、その辺で学科というものの枠組みがかなり窮屈な感じになっているという印象があって、恐らく3学科すべてそうだと思うんですけども、要するに学科のコンセプトを一つに集約をしていくことによって、逆に人間科学部の多様性が殺されているというのが現状だと思うんですね。だから、学科のコンセプトに集約しつつ拡散しないと、学際的な研究の方向性というのは多分出てこない。人間科学的なあり方というのは生まれないだろうと思うんです。

## キーワード“人間発達”の行方

**根ヶ山** 今の議論をお聞きしてまして、10年目ということですよ。それで、いただいた資料も読ませていただいて、一つ不思議だったのは、やっぱりつくってこられた方は10年を見てこられて、自分たちのしてきたことは何であったのかという、その総決算というか、そこで一応決算をされてないというか、過去のできるまでのいきさつと、それから将来に向けて若い人よろしくという話はありませんが、真ん中で自分たちが何をしてきたかという話が非常に希薄だったというふうなことです。

人間科学がもともとできたいきさつというのは、やはり個別科学が行き詰まっているといえますか、個別科学を幾ら寄せ集めてみてもだめで、何かそこで人間の問題を、つまり個別科学がどんどん細分化していくということは人間の問題を決して解決しないというか、人間を幸せにする方向に科学が必ずしも働いていないという、そういう自覚が人間科学というものが必要だということ、そういう考えを生んだと思うんですね。ところが、今お話を聞いていると、何人かの先生方から個別科学へ戻るようなベクトルというか、すごく求心的なものとの反対の、やってみただけちょっと難しいとか、どちらかという人間科学とは反対向きの意見がこの中から出てきたということが、私はすごく残念な気がしているんですね。今の話の中で一つ言うと、私、これを読んで非常に意外だったのは、人間科学部ということを知ったときに阪大の人間科学部というのが、さっき野呂先生は筑波の方とおっしゃいましたが、やはりその時期にできてきて、設置審なんかの絡みで学部のアウトラインを書くときにそれは相当意識されたと思うんですね。その議論の中でそれが一つも出てきていないということが不思議でしょうがないんですけど、スポーツ科学科をつくるというのはすごく早稲田らしいユニークさだという位置づけがあったと思うんですね。

スポーツのことは上田先生が熱く語っていらっしゃるから十分議論があるんですけども、もう一つ、つまり私が不思議で残念だったという意味は、「早稲田フォーラム」の中で浅井先生が書かれていらっしゃることで、学部の共通の理念が、生涯発達という観点からいろんな領域が総合的に論じられるんだということをお書きになって、私はまだこちらへ来て1年余りですけども、来るときに学部の要綱みたいなものを読ませていただくと“人間の発達”ということをごく共通の接点にして、かなめにしてられるように読めたんですね。ですから、いろんな領域がばらばらにならない、それを束ねるかなめに恐らく“発達”ということが当初はあったんじゃないかなうか。それが何かどこか行っちゃっているなどという感じが非常に不可解だという印象があったんで

すね。だから、そのあたりというのはもう一度立ち戻って我々は確認しなくていいことなのかどうなのか。何か結局その宿題を提出しないまま霧のように薄れちゃっているといえますか、そこが実に不思議な感じなんですね。そのことについてしばらく見てきていらっしゃる先生方はどうですか。

山内 “発達”のことに関してだけちょっと触れさせてください。カリキュラムを変えるに当たって、カリキュラム検討委員会でそれに関しては随分議論がありました。人間というものを、または人間科学を発達だけでまとめるというのは無理があるというものです。それは人間の側面である。だから、人間科学部では発達だけを中心にしてやっていくんじゃないかという意見が多くありました。発達の名のついた科目は、新しいカリキュラムではほとんどなくなりました。

根ヶ山 そのところが何かけりをつけていないといえますか、ボーンと花火を上げて、それをやめるよといったときに、努力してここまでできたけど、ここから先はわからないからという、言葉は悪いんですけどその落とし前というんですか、何かその問題提起をしてどこまでやった結果次へ行くのかという、その整理をつけていないんじゃないかというふうに思うんです。

山内 カリキュラムの検討委員会の中にもこの前の座談会の先生方がおられまして、発達というものを必修から外すことに随分抵抗がありました。ある先生はやはり発達というものは非常に重要であると主張されておられました。我々も大事であるとは思っているんですが、どちらかという若い先生方たちが中心となって、そういったものをまず最初ゼロにして、そこから考えて新しいカリキュラムをつくりました。結果として、発達というものが中心にはならなかったわけです。

野嶋(司会) 逆に言いますと、結果的に浸透しなかったということもあると思うんです。つまり“生涯発達”というキーワードで学部を持ってこうとしたときに、具体的にそれをどういうふう展開していくのかというイメージを、そのリーダーシップをとった人たちが出せなかったんだと私は思います。今もって私にとっても明確じゃな

いですし、生涯発達という言葉はわかりますけど、それは発達をこう読むんだという読み方の問題ですから、私は別にその理念は今何も消えていると思わないし、むしろこの時代の中で、例えばジェロントロジーみたいな形とか、我々のところの環境系でも老人を扱う福祉的な問題だとか、みんなそこに手が伸びていくと思っていますし、やっていますので、そういう形で生きている形ではだめなのかなと。つまり、生涯発達というときにそれが残っている形というのは、どこぐらいまでそれを包含していると残っているのかなというように、逆に言うともありますね。

**根ヶ山** だから、人間科学部の求心力として、それが何かフルにといいますか十分に、人間科学全体の一つの共通の基盤としては機能を十分しなかったということなのかなと思うんです。

**野嶋(司会)** 司会をやっている立場で自分の考えを述べすぎるのもどうかとは思いますが、私自身は、人間科学部は例えばスポーツがそうで、健康というコンセプトがそうなんですけど、もう一つ基礎というのがあります、これも半分生物ですけれども、完全に人間を包含する概念として対象とすべきところの世界の片側しか目が向いていないんだと思うんですね。それは体と心とかというその部分だけなんです。例えば私なんかの概念の中には当然情報などもありますし、環境もあるわけでしょう。人間環境学部というのが最初構想されていたんですけれども、それはいつの間にかほとんど縮んでいって、むしろスポーツとスポーツに近い健康というようなものが表に出ていて、これが大部分を占めている。こういう形になっていて、実際は僕は半身だと思うんですね。片肺飛行だと思うんですよ。

そういう面は、人間科学部をこれから構成するときに、多分阪大の人間科学部と大きく違うところは、情報と言わなかったって例えばシンボルシステムそのものもそうなんですけれども、その部分に関しては完全に欠けているんだと思いますね。その辺が実は本当のこと言うとは僕は大きな問題ではないかと思う。つまり人間、体、心と発達とかという言葉だけで人間科学をやっているときに問題が生じてくるんだと思います。

## 学科の垣根の功罪

**野呂** この座談会記録を読んで僕が感じたことなんですけれども、当然この座談会はこの人たちがいろいろ苦勞されたということで出席された座談会ですね。ただ、何かの機会に違う人にも話を聞いたらいいんじゃないかということも思ったんですね。そういう意味での人間科学部が創設されることについて非常に重要な影響を及ぼした人というのは、やっぱり3人ぐらい僕は思い当たるんです。1人は元総長の西原さんですね。それから当時の医師会の会長だった武見さん。それからあと、今、健康科学研究所の所長をやっている大島正光さん。この3人は、この人間科学部を創設するときのある一種の方向づけ、あるいは理念というものにごく関係しているような気がするんですよ。

まず西原さんは、私は西原先生から初めて人間科学部というものの、そのときは人間総合科学部と言っていました、そのときに彼から直接聞いた話というのは、この記念論集（早稲田大学人間科学部記念論集——人間科学への道、1987年）の中で浅井先生がある引用をされる形で載っていると思いますし、人間科学部を創設したときの創立の記念の会をここでやったんですね。そのときにも西原先生はそういうことを言っていたと記憶されている方も多いと思いますが、要するに20世紀の一種の科学技術がどんどん高度化されていく中で、人間というものがどんどんスポイルされていく。それではだめだから、人間性の回復ということ、これは21世紀の一つの大事な問題なんだということ、これをここで言っている。逆に言えばそれ以外のことは余り西原先生は言っていないんですね。

それに対して具体的にどうするか。例えば武見先生なんかは、早稲田が医学部をつくらとって、そう簡単にできるものじゃないから、医科学というのをやればいいんじゃないかと。いわゆる医科学、理工学部とか教育学部なんかのそういうことに関する医科学、医工学、このあたりの人たちがかなりそこら辺では学部の中で何かやろうと思っていたというふうだと思うんですよ。それから、大島先生については、やっぱり体育、健康、



医学、いろんなことに関係していますから、もちろんストレスにも関係していますし、非常にいろんな影響を及ぼしたんだろうなというふうには思うんですね。

そういう僕なりの理解の仕方から考えてみると、例えば発達の問題とか、心の健康とか、そういう言い方をしているのは何かというと、それをどんどんどんどん細かいところに切って、ちょうどここでやっているこういう先生方というのは、例えば実際の実行部隊だとすれば、実行部隊としては、結局総長が考えた大きな理念みたいなものをいかに自分のレパートリーの中に切り刻んでいくかという仕事をした。ところが、そこからスタートしたのだから常に問題が、例えば発達が大事なのかとか、心の健康が大事なのかというような話のところでもう終わっちゃって、それも一つ前のもっと大きな意味での理念になかなか戻らないところがあるというのが、この人間科学部の持っているやはり問題だろうと。

ここでは、設置審の審議過程において人間総合の「総合」という言葉を削れとか、それから、やはり学科の垣根はつくりなさいということにして、当時の文部省の設置に向かってのガイドというのは、どちらかという個別化していく方向に行ったというのが、僕はすごく大きいような気がしますけどね。

佐古 今、野呂先生のお話を伺っていて、あなるほどなとよくわかったことは、そういう形で実際にある理念があって、そしてそれを学部として構築していこうといったときに、その当時いろいろ努力なされた先生方がどういう形でそれを具体化したかということと、それに文部省とか設置審とかがどういう形で干渉してきたかということですが、結局でき上がって見たときに、そのでき上がった体制で人間科学に戻っていくときに、やはりなかなかうまく立ち戻れなかったという印象です。

というのは、これは人間健康科学科ではほとんどやりませんでした、人間基礎科学科の中では、人間科学とは何かということで、盛んにいろいろなシンポジウムだとか研究会を繰り返して、人間科学のコンセプトを追求なされた。しかし、そう

いった中である先生が言うには、「人間科学というのはこれからつくっていくんだ」とか、「人間科学とは何か、自分たちでも説明できないようなものを、一体世間に対してこれが人間科学だなんて言えるのか」とか。だから、そういったことはそもそもやったって、今ないものをこれからつくるんだといっても、あるいはこれからつくるものが何であるかということについて幾ら議論しても、それは仕方がないんじゃないか。そのようなことも言われたことがあったんですね。

ですからそういう意味で、人間科学とは何かという部分と、それから当時あった理念、理念はこの「フォーラム」のように幾らでも書くことはできるわけですが、しかし、その理念を具体化していこうと考えたときにでき上がってきたものとの間にギャップがありました。それから、人間科学を学部の中での学科制という形で作ったものだから、当然学科の名前というものが問題になってきた。学科の名称が人間科学と一体どういう整合性を持っているのかという点で、やはり先ほど学部と学科をつなぐ真ん中がないと谷川さんはおっしゃったけれども、さらに言えば、学科の名前というものと、それからその下にいる先生方の専門との間の整合性というのがなかなかうまく解決できなかった。

しかし、それは考え方によっては無理もないとは思うんですね。人間健康科学科の健康という言葉はむしろスポーツ科学科に近いわけで、そちらとくっついた方がはるかに説明しやすいのかもしれない。僕なんかはそう思っているんです。しかし、学科制をとりながらも、根ヶ山先生がおっしゃったように、では人間科学の方に収れんしていくということではできないのか。そんなことは実はないわけで、文学部は専修というものをつくってやっていたわけですが、あそこの学科はもう有名無実ですよ。むしろ専修単位が実体ですよ。ですから、ある意味では我々の方でも人間健康科学科の中に系をつくっているわけですが、それは文学部でいえば専修に相当するようなものになっているんだろうと思います。

ですから、そういった形でさらに細かくやれば、それぞれの演習、先生方が持っている専

門教育の部分、先生方の専門の部分を、何らかの形で学科の枠を越えるような形で組みかえてやっていくことを一つの運用の方法と考えていけば、根ヶ山先生がおっしゃったことはまだまだ可能だとは思っておりますけど。ただ、今の学科制というのがうまく機能しているかという、必ずしもそうは言えないというのが実情だろうと思います。

**野嶋(司会)** 結局、いろんな紆余曲折があろうと、そこにできた学科があり、そしてそれはそれなりの定義もある。だから、少なくともそれをある意味で遵守しながら成長しようという考え方で、余りその枠にとらわれなくて、むしろ自分たちの発展できる方向性の方を優先させながら、上の枠の方をもっと緩やかに考えていった方がいいんじゃないか。この2つの姿勢は常にあると思うんですよね。そういうような意味において例えば人間健康科学科の場合に、例えば佐古先生はむしろ緩やかな考え方の方をとっていらっしゃる。例えば人間基礎科学科なんかはどうなんですか。健康科学科が抱えているようなコンフリクトはございますか。

**山内** 学部のできたてのときには、基礎科学科では人間科学に関する勉強会を行っていました。悪いことではなかったと思っているんです。春木先生ですとか濱口先生、そういった先生方が中心になって行われていました。根ヶ山先生が、創設にかかわった先生方が10年間をどのように結論するか考えが述べられていないとおっしゃっていたけれども、たしかにそうです、非常に努力をされたところもありました。基礎の中心となる生命科学、心理・行動学、社会学が融合しなければいけないということで、そのために勉強会を開いていたわけです。ではどうしたら融合できるのかというようなことを先頭に立つ先生方がそれぞれの領域からまずは話をされたんです。結局、こうやればここが一緒になる、こうやればここが一緒になるといった、非常に概念的な話が中心であって、僕なんかは、それじゃわからない、できやしないよと非常に厳しいことを言っていたんですけども、それでもやはり努力はかなりなされてきていると思います。

恐らく人間科学部が抱えているものを縮小したような形で基礎科学科に問題が存在しているんだと思うんですね。その3つが融合するというのは一体何かということなんです。一人の人がそれらを全部できれば、人間科学をやっているということではないと僕は思っています。

一人で全部できるようになるなんていう発想ではとてもお互いの理解は無理なことですし、思っただけが堂々巡りしていて、人間基礎科学科では3つの系がうまい形で進んでいるとは必ずしも思っていないですね。例えばプロジェクト研究ですとか、そういったことから始めて、実際に相手方の立場に立てるような、そういった何か情報のやりとりというものが必要なんじゃないかなと僕は思っています。ですから、非常に厳しい言い方ですけども、まだまだできたときと同じ状態だなと思っているんです。新しくこられた根ヶ山先生はどういうふうに感じられているのでしょうか。

#### 臨海領域における“融合”とは？

**根ヶ山** むしろ私は、さっきからの議論をお聞きしていて、学部ができたときのままでというよりも、一たん努力してそれがおさまっちゃっているという状況は、一層悪くなっているんじゃないかと(笑)。これはなまじやってもだめだぞという、だからよっぽどのことを考えたりしたりしないとだめだと思うんですね。

それで、ちょっと言葉尻をとらえるようであれなんですけど、今山内先生が融合とおっしゃって、野嶋先生がこの中で使っていらっしゃる言葉なんですね。ところが、総合とか学際とかという言葉は当初からあって、それは解け合って一緒になるということではないんですね。それぞれの立場の違いということを確認しながら、しかし、人間を科学するということは、私が言っていることではなくてさっきからもう既に言われていることですけども、やはり個別科学に細分化してタコ壺に入っちゃうと人間が見えないという、その問題というのはここに籍を置いている以上外しちゃうだめだと思うんですね。ところが、どうもそちらの方には何かすごく引力があって、個別科学の細分化というか細かくなっていくというのは学問の方向

としてすごく安定がいいんですね。だから、いやそれじゃだめなんだと言って、ひっくり返すような努力というのを意図的に絶えずしていないと、何かおさまりのいいところへおさまっちゃうという気がするんですね。

だから、我々というか私の先輩の先生方が一旦それで試みて努力はしたけれども、そこで今こへ来ているというのをもう一度やはり蛮勇を振ってかきまぜるといふようなのが必要で、そのときに相手の立場に立つといふのは物すごく大事なことだと思ふんですけど、僕はある意味ではすごくけんかしてもいいんじゃないかと。私の立場は違うよと、私の立場だったらこういうふうを考えるけど、あなたはそれに全然答えていないじゃないかとか、言葉はもっと紳士的になるでしょうけれども、何か私たちがわかることはここまでで、その先はあなた方ですよ。あるいは、あなた方はここまで言っているけど、ここに全然答えていないじゃないかとか、そういうそれぞれの領域がカバーできるエリアがあって、それを突き合わせて限界をお互いが自覚するといふんですかね。あるいはこういうことをあなたたちにしてほしいんだとラブコール、エールを送り合うとか、そういうけんかしたり仲良くしたり、いろんな形があっていいと思ふんですね。

**野嶋(司会)** 根ヶ山先生、さっき非常にストレートにおっしゃったと思ふけれども、個別科学では成り立たなくなっているという事態があると。だから必然的に、つまり自分の中の研究をやっていたにしろ、どうしたってその臨界領域の隣と接触せざるを得ない状況はもう来ているんだとしたら、学問を自然にやっていたらそうなるんじゃないですか。

だから、例えば自分のことを考えますと、私どもの領域——教育工学というのは学会自身が完全に混然と一体となっているし、いろんな学問の人がいますから、そんなのは当たり前なことなんです。つまり無理してやることじゃなくて、臨界領域の複合的な学問ですから、ごく自然に自分の中で既にそれをやっているわけですし、例えば現場と付き合っただけで何かを問題解決していくということ自身だって、非常に一歩踏み出したことだと思

うんですね。

だから、大学の中で融合しなくたって、私の場合、融合という言葉がびったりくるのですが、現場と融合していてもいいでしょうし、つまり広がり方というのは、研究者の世界ですから例えば岡山大学の先生とリンクしたっていいわけですし、それはもういろんな形で、リンクできるのではないかと。そんなストイックに厳密に考えなくたってとも思ふんです。このようなことは、自分のことと言うと何も不思議なことではない。例えば野呂先生にしたって、佐古先生にしたって、私の周辺にいる先生方は、みんなそうだと思うんです。

**根ヶ山** そういう指向性のある先生方がこの場に集まっていられるということはまずあると思ふんですね。やはり人間科学部という組織の中の一員であって、そこで教育をしている立場の者だということがあったときに、確かに僕も学際的なことは多少やっています。皆さんそれはやっていられると思う。だからそういう指向性のある人が集まっているというふうには僕には一つは見えるわけですが、やはり意図的にそれをするとはしないで、随分その成果といふのが違うような気がするんですね。意図的に場所をつくって……。

**野呂** それはそのとおりなんです。意図的ということには僕は非常に大事なような気がするんです。どうしてかといふと、学問の一つのしがらみといふか、それぞれが一人の学者として、あるいは研究者として一人前になっていくというプロセスがあるじゃないですか。そうすると、例えば学術論文を出すとか、それから文部省の科研費を申請するとか、いろんな側面で総合領域とか学際領域といふのはやっぱり非常に厳しいです。そうすると、どうしても逆に個別のところにとんどん入り込んでいく気持ちがおのずとして、学問といふもの自体が持っている一種のさがみみたいなものはあると思ふんですね。だから、それはそれでやっていかざるを得ないし、その上で、結局何か融合とか学際とか、そういうことをやるんだとしたら、やはり意図をしないとできないだろうという気が僕はする。だから、「意図的」といふことはある程度大事だろうと思ひます。

その点で、実は先ほど門前先生が、大島先生の

話の中に戦術的研究と戦略的研究があるといっていました。僕は戦術、戦略という言葉はちょっと抵抗があるんです。大島先生と若干世代が違うから、どうも戦術、戦略は……。ただ、私の理解としては、戦術的研究というのは、いわば手法の研究、方法論の研究だということですので、より学問領域の研究というので僕は理解して、では戦略的研究というのは何かというと、人間科学部でいえば人間の諸問題というような、ああいうところにあるはずだろうと思うんです。

早稲田大学が人間総合科学部とかいうのをつくるときのいわば理念というんでしょうか、それは当時の話だろうと思いますが、いわゆる科学技術が極度に発達し、人間が人間性を失い云々という話自体を解決しようということ自体が戦略的なんです。極めて戦略的な形で出てきた学部です。しかも、人間科学部創設以来、人間の諸問題という総合講座ですか、あれがあるじゃないですか。だから、少なくとも戦略的研究、戦術的研究というのはあることはあるだろうと思うんですね。

ただ、「意図的」という中にも入れてもいいのかもしれませんが、人間科学部として、100周年記念事業審議会ですか、百審があったのが1977年ぐらい、今から20年前ですね。20年前に意識している人間性の復活とか回復とかいうこと、当時の社会的な諸問題、あるいは人間にかかわる諸問題と、現在の人間的諸問題というのは恐らくかなり変わっているはずだと思うんです。いわば、そういった時代の節目節目での人間の諸問題に対する認識の違いというものがどこかになきゃいけないだろうと思うし、それをさらに解決するための戦略的な研究というのはあっていいだろうと思うんです。だから、別な言い方をすれば、この10年間、ではそういう新たな人間的な諸問題に対して何か提案したのか、この学部はそれを問われるかもしれないですね。

野嶋(司会) そういう意味で言うと、また上田先生のお話を拝借するわけですけど、実践的学問と、理論的だか基礎的なというふうに分けていらしたような気がするんですけども、やはりこの学部も、今のその戦略、戦術も含めてこの学部自身はどういう社会的使命を果たすのかとか、

トータルとしてどういうところをねらっていくのかということも、ある意味で自覚しなきゃいけないことはあると思うんですね。例えば文学部をつくったときみたいに、好きな学問をやっていたらいいというようなわけにはいかない状況の中でつくられた学部だとは思いますが、ついでですからその辺について話を広げていけたらなと思います。どうぞ、竹中先生。

竹中 ちょっとむちゃくちゃな話になるかもしれないんですけども、私は国立大学に勤めているときに、教育学部ですから、理念とか定義とかそういうのがうるさかったんですね。それがいつも私は鼻について嫌だったんですけども、反対にそれに縛られてしまっている。今の日本の教育は本当は理念とか定義なんかではなかなかくなくて、社会のこれだけの速さに負けてしまっていてどんどん変わってきているわけですね。だから、その時代時代に応じた理念なり定義なりを考えていかないといけないのに、教育というのは最も古いところですから、その理念ということに縛られてしまってなかなかそこから出れない。それを目の当たりに見ながら、その理念を重んじるばかりに悪い循環を繰り返しているのを見てきたんですね。

非常に求心的なものに何か定義をつくったり、理念をつくるというのは大事なことなんですけれども、それは飾りとして置いておいて、例えば何年かごとにそれを見直していったらよいと思います。極端な話をすれば、キャッチコピーみたいなものでもいいと思うんです。ここの3~4年はこれで行こうというようなものをつくって、そのようなサブテーマのところをどんどんいじっていった方が、現実の社会との対応なんかを考える場合には非常に現実的じゃないかなと思うんですね。

またこんなことを言えば、佐古先生とか野呂先生にお叱りを受けるかもしれないですけども、早稲田大学の意思決定とか何か物をつくるときのシステムがきちっとでき上がっていない。例えばアメリカで僕はおもしろいなと思うのは、アメリカのインターディシプリーな研究の仕方というのは、それぞれが全然違うことをやっていて、何かのテーマについてきつと集まってきて、自分たち

の専門からそれを見てやる。そして、1年か2年したらまたパッと離れると。要するに日本の場合だったら、意思決定をしようという時まで、みんなのコンセンサスを得るために何年もかかってやっとできる。そうすると永遠にまたそれが続いていく。もう全然時代おくれのことでも続けていくという、こういうシステムを何とか変えないといいものができてこないと思うんですね。

だから、つくるときはもう速攻で今に合ったようなものをパッとつくってしまう。そして2年すれば見直して、だめならやめる。そのぐらいの何か学際的な物の考え方をつくっていくように、人間科学部の中の定義とか理念なんかも、サブテーマとして変えていけばいいんじゃないかなと思うんです。そこら辺のところ、何かこの間からずっと早稲田大学のシステムをつくるプロセスがうまくいっていないなという感じがしています。

**野嶋(司会)** 製品をつくる時のようにアイデアを固め、あるいは仮説を立てて、2年間でだめだったらこれはやめるとか、そういうのはわかりやすいんですが、例えば大学みたいな組織をつくっていくというときのやり方として、今のは当てはまりやすいのかどうか。皆さんの意見はいかがですか。

**山内** 僕は結構それが大事だと思っていますし、カリキュラムに関してもそういうことが必ず当てはまる。これはやっぱり10年と言わず、5年でも3年でもいいから、その時代が変わって何かが変わったとなったら、そのところでパッと見直して、パッとつくって一番いいものにしていかないといけない。カリキュラム委員会での議論の中で、人間科学の一つの顔として、これはいつも変わっている、流れているという表現がありました。そういったものであるからには、絶えず新しいものを取り入れるなり何なりして変えていくというのは重要なことだと思います。変わっていくというのは、人間科学部でも重要なキーワードになるんじゃないかなと思っています。だから竹中先生がおっしゃったことはよくわかります。例えば研究に関して、プロジェクト研究というものを人間科学部でつくるなりして、それもどんどん変えていく。

ただ、人は変わらないところがあるんですね。新しい人は入ってきますけれども、その人は60、70までいられるわけですから、その人がある程度新しいものを取り入れて考え方を覚えてくれないと、人間科学の変化に追いついていけない。だから、人間科学部に入った先生は個々の研究をやっているというよりは、それを突き詰めてやらなければ世界に通用しないと思いますが、人間科学部の中でのいろいろな考え方を取り入れてもらって、プロジェクト研究なりを進める、そういった姿勢がほしい。人間科学部の中の人そのものも変わっていかなくちゃいけない、僕はそう思っているんです。だから、竹中先生がおっしゃったことは非常に重要なことじゃないかなと思います。

**竹中** この間、慶応の新学部のお話を聞いたことがあるんですけども、あそこは要するに日本の私立大学の先端を走っている意識がすごく強いんですね。そうあり続けなければいけないという意識もまた強いんです。だからしょっちゅう会議をやって、新しいこと、新しいことをやらないとダメ。それを聞いていると、アメリカの大学とまさに同じことをやっているなというのが、今慶応の藤沢キャンパスだと思いますね。だから、人間科学部も非常に新しいので、やはり新しいことをどんどんやり続けないと置いていかれるという感じはあるんですけども、反面、あそこはいい手本だと思うんですね。実学一本ではなく、どこかに芯になるような、幹になるようなものを持っておかないと、ただ新しいことだけどんどんやっていくという話になってくるので、両者をうまく合わせていくことが大事ななという気はします。

**佐古** 山内さんの話を補強することになるんだろうと思いますけれども、僕が教務をやっていたときにカリキュラム改革の話が出て、それで、実際カリキュラムを変えるということについては、山内先生が委員長をやっていたもう一つ前に、既に第1次の委員会があったんですね。あったんだけど、しかし変えられなかった。ですが、10年もたって、それではいけないんじゃないかと。ほかの学部はすべてカリキュラム改革のある部分やってしまった。そうしたら、人間科学部はつく

られたのが一番新しいとはいいいながら、人間科学部のカリキュラムが実は一番古いという状態が起こってしまったわけですよ。だけれど、それを変えようとするときに対しては、やはり極端なことを言って、古い先生たちの中には変えたくないという考えの方がおられたようですよね。しかし、そこはかなり強引にやってしまった。

山内先生はいろいろ努力なされ、実務的なことをやってくださったんですが、私は教務をやっていましたから人間科学部のカリキュラムの理念について何か書かなくちゃいけない。そのときにどうしても人間科学部は、そういう意味で竹中先生がおっしゃった「新しいこと」を標榜しながらやっていかななくちゃいけない。人間科学部のカリキュラム改革とは何なのかというときに、私はイノベーション・スクールと書いたんです。もちろん学校の評価は、そう簡単にカリキュラムでも何でも1年やそこらで変えるというわけにいかないでしょう。やはり3年、5年単位での見直しです。そういう単位でカリキュラムも変わるとよい。山内先生には随分抜本的なことをやっていただいたから、今度は細部かもしれないし、あるいはまたもっと組み替えなくちゃいけないのかもしれない。そういう意味で3年、5年単位でどんどん変わっていった方がいいんだろうと思う。

ただし、カリキュラムは変わったけれど、では学科制というものについてはどうなのかとか、それから学科の中を構成する、例えば人間健康科学科で言えば系、学系のあり方ですね。スポーツ科学科には見えにくいんだけど、学系、学群はやはりある。人間基礎科学科の中には社会、生物、心理という3つがあるんだというふうにおっしゃっていた。しかし、それらの学系がそのままいいんだろうかという気持ちがあります。そのところが変わってくれたらいいんだけど、と今は思っています。

しかし、他方では、根々山先生がおっしゃったように、具体的な授業とかカリキュラムとか、そういったものはいいと。だけれど、研究者として、人間科学部って一体何か研究的な面で、そういう学際的で何かいいものをつくってききましたかと言われると問題が生じます。総合講座はありますよ

ね。しかし、そういった形式で学部の中での学問、研究にいろいろな交流があるのかと言われると、それはまだ部分的なもので終わっているのだろうという印象ですよ。いわゆる戦略としてどういう形式で学部として、あるいは学科として具体的な研究面で何か新しいもの形成していくところまではまだ踏み込んでいないのだろうと思います。

村岡 僕自身も、今先生方からお話があったように、やはり変わらなくちゃいけない部分というのはあると思うんですね。その努力はしていかななくちゃいけないとは思いますが、竹中先生がさっきおっしゃったように、そのためにはその根幹になる部分、変わらない部分というのがあるべきだし、ただ、それがまだ見えてこないのかな、あるいははっきりしていないのかなという状況が今続いているという気もするんですよ。だから根幹、幹をなす部分は何であるかというようなことを、きちっと時間をかけながら確立していくことが必要だと思います。

あと、ちょっと気になるのは、変わることはもちろんいいんですけども、何に対して変わっていくのか。我々はどこに目を向けながら、何に対して我々を変えていくのかというその部分をやはり考えておかないと、何か時代のニーズに合わせてと先取りするような感じで変わっていけばいいというような問題でもないと思うのです。その部分をどう考えるかだと思うんですが、僕自身もよくわかりません。

#### 方法論の変容と取り込み

門前 さっき竹中さんの話を聞いていても刺激されたし、野呂さんの話を聞いていても刺激されたんですけど、ちょっと私が思うのは、我々が今まで身につけてきた専門領域はやはり方法論だろうと思うんですね。その専門領域における個別の方法論はしっかり持っている。それに対して今まではその方法論で対象まで決めていた。ところが、人間科学という形でもっと幅広く見たときに、ポーンとそういう対象を前にしたとき、我々の方法論で追求するけれども、自分自身の方法論は少しづつ変わらざるを得ないという形の、そういう独

自のちょっと変容されていく方法論ができ上がっていくんじゃないかと。

だから、個別の方法論を足せば一つのものでできるんじゃないくて、ある一つの対象ということで、そのことで人間の諸問題で生と死なんてしゃべれと言われると、私なんかは、生と死とってああいう死んでいく人を余り扱ったことがないから、だけど考えないといけないわけですね。そうすると、私の臨床心理の中でちょっとやっぱり幅を広げないといけない。今度は遊びについてしゃべれなんて言われているから、私個人は遊べるけれども、自分の専門領域でしゃべるとなるとやっぱりもうちょっと広げないといけない。そういう形ですごく要求されて、私自身の方法論が少しずつ変わってきている感じがするんですよ。

そういう中で、私は臨床心理寄りの方法論だけれども、幅がそう変わってくるというような、今までは個を足していけばその全体が見えるかという、そうじゃないと思う。全体は全体独自のものがあるんだと。さっきの研究でも、研究者同士が集まったら新しいことをやるかと思ったら、そうじゃないと思うんですね。それよりも、何かの現象を目の前に出されたときに、それを自分の方法論だけではどうしても理解しきれないから、やはり幅を広げていかざるを得ないし、ほかの先生方の方法論も参考にして自分自身を変えざるを得ないという。だから、人間科学というのはある意味で非常に雑学であって、雑学は非常に現実的ですから、そういう形の中で我々自身の方法論も変わっていく。何々学と言われるのは、やはり方法論だろうと思うんですよ。

山内 先生がおっしゃっているのは、やはり文学部出身の先生がおっしゃっている言い方ではないでしょうか。なぜかといいますと、方法論というのは我々は変えられないんですね。例えば人間を追求していくのに、僕がやっているのは生殖生理ですから、子供をつくる機能を生物学的に調べている。人間の体には、生きるためと子供を残すための機能があるわけですね。その中の例えば脳の機能に興味を持っているときに、脳の中に電極を差し込んで調べる方法がある。別の方法で同じ結果が得られるでしょうか。

門前 いや、私もできないです。

山内 だから我々ができるのは、プロジェクト研究などで、なるほどこういうふうな側面もあるということを知るとか、こういう側面もあるという結果を提供する、そういったことしかできないんじゃないかなと思っているんです。

門前 従来の科学研究における総合研究は一般的にそういうやり方をしてきましたね。だけど、山内先生のところでも、若いころの研究方法論から今を比べると随分それなりに変容はしてきている、幅広くなってきているだろうと思うんですよ。

山内 考え方は、人間科学部に入ったからにはそれは広くなりました。ただ、サイエンスの結果を出そうとすると、どうしても狭い方法ということになってしまう。先生がおっしゃっているのは方法論の解析ということですか。

門前 いや、ちょっと誤解されている感じがするんです。

山内 そのところがわからない。もしかして方法論ということに関しての定義が違うのかもしれない。

門前 いや、同じです。私も本質は同じなんです。けども、ある現象を見たときにやっぱり私の方法論をちょっと広げないといけないということがあります。変えるんじゃないくて、広げないといけない。

谷川 対象によって方法が決まってくるというのは確かだと思うんです。ただ、人間の思考方法というか、組み立て方というのは、その対象と方法にかなり規定されている部分があって、例えば私の領域で言うと、歴史の時間の流れをどういうふうに見るかという、文献の資料だけで歴史を見ている人というのはどうしても変革を見ていくんですね。ところが、我々考古学では変革というのはすぐには見えない。例えば遺跡の発掘をやったときに、遺跡は変革そのものではないですから、ある意味で日常から変革を見出していくという形になるわけです。

だから、歴史を研究している人たちが全部同じように見ているかというところではなくて、対象と方法によってかたよった見方をしていて、思考方法自体もそういうふう染まってきているわけ

ですね。その限界を自分でどれだけ悟っていくか、思考方法の限界と特質をきちんと認識していくことの意味というのがかなり大きいと思うんです。

それは、違う領域の人間と接触したときに、初めて鏡の前に立ったときのように自分の姿が見える部分があって、議論することによって初めてそういうことが自覚できる。そうすると、我々にとっての変革と、彼らが言っている変革というのは、ひょっとしたら違うものを見ているんじゃないかというようなことにもなり得るわけです。

結局、学際的な研究の際にお互いの壁を突破していく一番重要なポイントというのは、できるだけ同じものを見ることだと思うんです。対象をどれだけ共有できるかということからしか始まらない。だから、同じテーブルについて一つのテーマについて議論し合うというのはもちろん意味はあるんですけども、そこから先はフィールドを共有するというようなところまで行くことによって、実は問題がもっとクリアになってくるという感じがするんですね。

#### 対象を共有する共同研究を

**野嶋(司会)** その共有できる対象をとにかく探さないことには、あるいは見つけないことには、共同研究はできない。一緒にそこで同じ研究をすることはできないということはありませんね。

**村岡** だから、僕なんかは門前先生の言うことはすごくよくわかるんですよ。というのは、我々も運動とカスポーツというものをとらえて研究しているわけですが、今からそれこそ15年、20年前ですと、我々は生理学者だ、生理学的にそれをとらえればいいんだと言ってずうっとやってきたわけですね。心理的な問題は我々とは関係ない。生理学的に見て、こういう運動はこうである、あるいは規則的にそれを繰り返していくことによって、生理学的な面でどういう効果が出たかというそれだけを知ればいいと。そして、心理学者は心理的な面だけからやっていた。そういう時代がずうっと続いてきたわけですけども、どうもそれじゃやっぱりいかんと。生理学的なことを考える一方で心理学的なことも、あるいはもちろん医学的でもバイオメカニクスでも何でもいいですけ

れども、トータル的に考えていかないともうどうしようもないだろうというところに、ある意味では行き着いていったんですね。そういう意味での方法論をちょっと広げる、あるいはほかの人たちとの共同で、ある一つの事柄に対して研究を進めていくという時代要請というか、我々研究者としての必要性ということも感じてきたんだと思うんですよ。

ただ、それだけだったら、先ほど根ヶ山先生からも話が出ましたけれども、例えばそれは生理学者と心理学者がどこかに集まってやれば、ある程度解決できる部分でもあるわけです。ただ、やはりここに人間科学部というのがある以上は、例えばそれが必然的にそういう組み合わせで研究を進めなきゃいけないというような、野呂先生も先ほどそのようなことをおっしゃいましたけれども、そういうシステムができ上がっていて、そうせざるを得ないような状況で研究が進んでいく、そういうところに人間科学部のよさみたいなものを求めることはできないのかなという気がするんですよ。

**野嶋(司会)** そういうシステムに今なっているかということ……。

**村岡** ちょっとまだ厳しいかなという気はしますよね。

**山内** 先生がおっしゃったのはわかりましたが、自分でその幅を広げ、手法をもう少し加えて何かをやっていくと、結局時間が足りませんね。例えばあるAということをやろうと追求している。これをそのフィールドで何か発表していくとなると、ほかのことをやっている時間がないということですよ。それを確立しておかないとやっていけない。Aが見えてこないと全体も見えないという部分もあるわけなんです。だから、考えることはできても、なかなか方法を広げることはできないことだろうと思っています。それが比較的やりやすいのは応用科学をやっている方、それは自然とそういうふうになるわけです。野嶋先生がいつもそうやっているんだとさっきおっしゃっていたのは、そういうところだと思うんです。共同研究をしやすい領域とそうではないところがある。

我々の領域でも1人1つの技術しか持っていない



いとしたり、こういう技術も必要だというときには共同研究をやるわけです。外から見たら、ただそれは生物系の領域でやっているだけでしかないと言われてしまうかもしれないけど、我々にとっては幅のちょっと広がったものになっているわけなんです。だから、心理も、社会も、それから生物も一緒になんていうのはなかなか難しいわけです。そのところを混同して議論するとまずいなと思います。

**野嶋(司会)** だから、さっき先生がおっしゃったことも、側にはいるけれども、先生にとって遠い距離の方法論と一緒にするなんていう話になってしまうと、それはとんでもない空理空論になっちゃうけれども、やはり隣接した隣とかというところから始まるんだと思いますね。

**山内** それで、人間科学部に入ってよかったなと思ったのは、基礎科学科には心理学、社会学の先生もいらっしゃるし、それから語学の先生も一緒にいらっしゃるでしょう。いろいろなことを話す中で、おもしろいな、こういう考え方もあるんだなというのがどんどん入ってきます。恐らく医学部にいただけではそういったものは入ってこなくて、自分自身もっと狭かったんだろうなと思っています。特に努力しているわけじゃないですけども、少しは考えが広がっているんじゃないかなと思っています。これは人間科学部ができたおかげであろうし、基礎科学科にいるおかげだろうと思います。それだけでいいと言っているわけじゃないなくて、もっといろいろな形で総合的にいろいろなものができるような学科のあり方があってもいいだろうしとは思いますが、ともかく自然とそうなっていることは確かだと思いますね。

**竹中** さっき山内先生がおっしゃられたことはよくわかるんですね。要するに先生が自分の手法を広げて、例えば心理学的なものまで入れてやり出したら、先生の仕事がぼやけてしまうと。要するに、幾ら学際的な研究であろうと、先生の立場の仕事がぼやけてしまえば、結局何をやっているかわからなくなってしまいます。だから、それぞれの人が自分のアイデンティティーみたいなものをしっかり持ってやるから学際的なものになっていく。

しかし、その後、谷川先生がおっしゃったみたいに、それらを統合するためにどうするかの問題ですよね。でも、それはそこで置いておいて僕はいいんじゃないかなと思うんですね。それをわざわざ一緒に合わせて何かをつくるということを考えるものだから無理が来て、結局よいところを薄めてしまうという形になってしまうのではないのでしょうか。鏡のように自分が見えたら、それでその分野の人はよかったし、自分たちの分野もまた違ったものを感じるだろうし、それを見た学生がまた違うことを感じてくれたらいいのであって、何かそれをわざとまとめなきゃいけないということまで持っていく必要はないんじゃないかなという気がします。

**根ヶ山** 融合ということにちょっと僕がクエスチョンマークをつけたのはそういうことなんですけど、やはり異質なものは異質なものの、異質であるということを確認するというのはすごく大事なことだと思うんですね。だから、僕はかつて霊長類学というのをやっていましたけれども、あそこではもういろんな領域の人が、谷川先生のおっしゃったようなお話だと思うんですけども、猿というターゲットを一にする者が集まってきて、いろんな異質であることを確認し合うということがあって、それはその場ではわけのわからんような話であっても、何か長い時間がたつと、ああ、ああいう見方というのはやっぱりこっちにも必要なんじゃないかということが見えてきたりすることもあるんですね。だから、余り門前払いのようなことをしないで間口を広くとっておくというような姿勢が、人間科学をやる上では絶対必要だと思うんですね。

だから、例えばさっきの議論でもあったんですけども、その方法論であるとかどうであるとか、そういう議論ももちろんどこかでは必要なんでしょうけど、何かもっといろんな意味を含めて全部その異領域の人とすり合わせをしますか、それで異同を確認し合うということが人間科学部の中ではいっぱい必要だし、またできる作業だと思うんですね。

**野嶋(司会)** まずは、異なった学問領域の人たちが同じ対象について学問できるようなというか、

集まれるような素材というのか、これを何とかありませんでしょうかね。つまり、今まではどうしたら一緒になれるだろうかという話だったんですけども、一緒になるということを一歩進んで、むしろ対象を発見することであると。実際はどんな研究でもそうですけれども、ある素材によって典型的な研究ができて、それから一般化できるなんてありますよね。つまり、例えば何とかの細胞だったらうまく研究ができるとかというのと似たようなもので、その典型的ないい素材を何か見つけると、そこで見事に学問領域を越えた研究の共同ができるのかもしれない。今我々がしなきゃいけないことは、そのいい素材を探すことではないでしょうか。

**野呂** そうですね。素材というのは、要するに料理をするという意味での素材というのはいろいろあるわけだから、この素材の中には缶詰に入っている素材もあれば、旬の素材というものもあるはずなので、やっぱりフレッシュなことを対象に人間科学が出てくる。これは何かというと、別の意味で言うと社会的な要請というんですかね。

やっぱり人間の問題というのは大事だろうと思うし、21世紀になったって今以上にあるんですね。例えば高齢化なんていうのはいよいよ進むわけでしょう。それからいろんな災害もあるし、だからそういう現実問題にどれだけ突っ込むのか。人間という名前をつけた以上は避けて通れないことというのはあるんじゃないですかね。要するに時代の要請みたいな、社会の要請みたいなものを、完全に無視して人間科学はできないというようなことはどうしてもあるような気がするんですが、そこが少し我々は不足しているかなという気がしますよね。

### 総合講座を研究チームに変える

**根ヶ山** さっき門前先生が総合講座、人間科学の諸問題ですか、おっしゃっていたと思うんですけど、これは研究ではなくて教育なんですけど、私は研究と教育というのは表と裏の同じものだと思うんですが、例えばああいうものというのはすごく突破口になり得ると思うんです。私も今2つばかり総合講座を担当していますけれども、例えば

ああいうものの中で異質な領域の人が出会うわけですよ。僕は人間科学部というのは出会いの場をいっぱいつくったらいいいと思うんですね。かなり具体的なものがああいう形でランニングしていて、それを学生が直接目にするという場面ですよ。だから、あそこで確かにいろんな領域の先生が並んで、学生が次々とそれをずうっとひと通り聞いていくというのももちろん一つのやり方ですし、そういうのが人間科学部の教育として一つの基本的なパターンだと思うんですね。学生が異質の領域をずうっと学んでいくと。

ただ、望むらくは、あそこで先生が集まって議論をする。ああ、あなたの領域はそういうことなのかとか、門前先生はさっき自分で勉強するだけで新しいことを学んでというふうにおっしゃっているけど、またそこでいろいろ議論し合うことによって、それぞれの立場とか自分の問題点だとかというのが確認できて、何かそれで自分のわかっていることとわかっていないこととか、得意なところと不得手なところというのが確認できて、例えばそれをそのまま学生にさらけ出したら、多分学生にはすごく勉強になると思うんですね。またそれが何か新しい研究に発展的につながっていくかもわからない。例えばそれが人総研のプロジェクトみたいなものに何かまとまっていくような方向が出てくるかもわからない。そういう人の集まる場として、ああいう総合講座みたいなものをうまく使えないかなという気はしているんですけどね。

**山内** そのとおりだと思います。ですから、あれはオーガナイザーの方がどのような形であれを発展させるかというのは自由なわけですし、例えば先生がオーガナイザーになられて、いいテーマでいろんな先生を選ばれて、ああいう総合講座なりをなさるといいと思います。そしてそれを、研究にまで発展させるような形でオーガナイズする。それは可能だと思います。ただ、今のシステムでいくと2年ぐらいでテーマが変わるということなんですけれども、そういった機会をどんどん利用されるというのは非常にいいと思います。

基礎科学科ではそういったことを考えて、早稲田の科研費に相当する特定課題研究費をみんな

申請しました。何人かの領域の違う先生が一つのテーマで大学に対して特定課題の研究費を要求し、それで研究を進めていく。そういうことも可能なんです。だから、それなりの道はあることはあるんですね。

現在は、集まってそういうことを議論する場所がないかもしれない。基礎科学科でやっていたような、新しい先生が来たら研究の発表の場を設けてみんなで議論するというような、そんなことをまた復活させるとか、基礎科学科ばかりじゃなくて全体でやってもいいんでしょうけれども、そういうことも一つだろうと思います。

佐古 先程、根ヶ山先生がおっしゃったように、総合講座はいいんですが、僕も物足りないなという気がしていたのはそこなんですよね。つまり、学生にとってはいつも何人かの先生と出会うわけですから、学生の頭の中ではこの先生、この先生といろいろ融合されるかもしれませんが、ただ、できるならば例えば最後の2週ぐらいを、来ていただいた先生すべて壇上に登っていただいて、そこで先生方の中で少なくともある程度の体験とか知識の共有というものが図られれば、あの総合講座はもっとよくなるんじゃないかなと思う。

今は私の番が来て、私は2週ぐらい講義して、それで責任を果たしたということです。先生方は何を話したんだろうとか、そういう部分についてはやはり入ってくる情報が少ないですよ。学生に聞けば、それは学生は感想として何でも言えますけれども、総合講座の使い方というものをもう少し工夫したい。総合講座担当者の集団で科学研究費も申請する。山内さんが今おっしゃった特定課題研究という早稲田大学の研究費や他の研究費を申請するというようにして、総合講座が核となって教育研究が発展していく。そういうやり方というのも考えられますよね。

野嶋(司会) 教員相互の情報を無駄にしないと、そういうことですね。

佐古 そう。今はすごく無駄にしているんじゃないかなと思いますね。

野嶋(司会) そうですね。大体大学ってそういうところですから(笑)。

根ヶ山 もう一つ、こちらに来て随分意外に思

ったことは、卒論発表会、修論発表会、博論公聴会ですか、ああいう場がすごく個別でやられているというか、特に博士論文の公聴会なんかは何度か顔を出したんですが、副査の先生がおられる以外は、もうその研究室だけでほとんどやっていたりする。その光景がすごく非人間科学的なんです(笑)。つまり教育的効果を考えても、異質な領域の先生が「僕、素人だけどね」と言って野次馬的に聞くと、「ああ、こういう領域の人というのはこんなことを大事に思っているのか」とか、「そうか。あの領域から見たら、この方法論はすごく問題だったのか」とか、何かそういうものができるとすごくいい機会だと思うんですね。だからそういうところに異質な人が集まって、私素人ですけどというようなことがボンボン飛び交うというような、例えばそういうものがすごく寂しい状況であるというのは、何かこの学部の先生方の姿勢とつながるものを感じて、すごく意外だったということがあるんですね。

だから、例えば講義でもそうだけれども、そのことを感じた一つの根拠というのは、昨年3月初めて卒論を指導したわけですが、3年、4年付き合っ、人間科学部で学んできて卒論を書くときに、その学際的なおもしろさというのが、一生懸命やってくれた卒業生には悪いんですけど、その発想から余り伝わってこない。何か人間科学としての教育が必ずしもうまく機能していないのではないかと感じました。それは実は学生の問題というよりも、教える側が人間科学的な発想を十分持っていないから伝わらないんじゃないか。幾ら科目を並べてみても、それはあくまでもハードウェアであって、それをどう運用するかという中身の人間の問題というものがすごく大事で、だからそれはさっき言ったことにつながるんですけど、なるべく異質な人が集まってそのすり合わせをする。そういう機会をいっぱい設けた方がいいと思いますね。そのためにはやはり努力が要ると思うので、何かおさまるところのいいところへそれぞれおさまっちゃうと、それはすごくやりにくいことだという気がするんですね。

## 危機感とその克服

**野嶋(司会)** 改善すべきところは、小さなところから大きなところまで、これまでの会議でいろいろ出ていると思うんです。ここで振り出しに戻すようなところもあるんですけども、例えば慶応のSFCがありますね。ああいうところは非常にはっきりしているのは、ニーズを考えた上で学部をつくられていると思うんです。その全てが良いわけではないですが、人間科学部は違うと思います。むしろ学内事情が優先している気がします。私は、この人間科学部は先生がおっしゃるようにわりかしゆったりと生活しているかもしれませんが、こういうようなあり方で10年、20年先に存在し得るのかというか、やっていけるのかというような、つまり我々自身は危機感を持たなくていいのかという感じがするんですけども。例えば現在の健康科学科という学科のコンセプトに対しても私自身は持っているんですけども、そういうような意味での渴望感というか、危機感を持っているのは私だけなんではなかろうか。先生方、いかがでしょう。

**山内** 今、SFCを引き合いに出されたんですけども、僕はあまりあそこの学部と比較したときには危機感を持っていません。というのは、やっぱりカリキュラムの改革のときも議論がありましたが、学生たちが根なし草になっては困ることです。外からのニーズに応じたものだけ、要するに即戦力としてのものを習って社会へ出て、機械を動かすだけの人間になってしまっただけではしょうがない。根っこがある。根幹があって、大学できちっと学んできたことを基準にして判断し、物が言える、やれる。あとは応用機能。もちろん大学でもこういう応用の仕方がありますよということも教える必要がある。そういう意味では、今度新しくできたカリキュラムがきちっと動けば、僕は問題ないだろうと思っています。

ただ、根ヶ山先生がおっしゃったように、我々がそういった意識を持たないと、今度のカリキュラムは学生がただ好きなものを選んでおしまいということになります。このカリキュラムの基本的なところはいろいろなものが置かれていることです。

どうしてこうなったかといいますと、人間科学の基礎というのとは一体何かということ考えたときに、いろいろな領域の先生がいて、それぞれの基礎教育があって、そういったことを考慮すると全部の科目が必修で埋まってしまうというところがあります。逆にそれだったらばすべて自由に選べるようにして、指導を受けた上で自分の好きなものを見つけて、それに沿った科目を履習し、身につけて社会に出てもらうのがいい。そういった希望的なカリキュラムなんです。だから、それさえちゃんと動けば、僕は心配はないと思います。ただ問題は先生方の意識なんですね。そこがしっかりしない限りは、それは野嶋先生が心配しているような状態になる可能性もあるかもしれない、僕はそう思っております。

**竹中** 人間科学部の卒業生に関しては、世間にほかの学科ほど色がないように思われて、そのまま卒業したら「早稲田大学」という後ろの看板だけで卒業しているところがあると思うんですね。スポーツ科学科だけに限っても同じことが言えると思います。よその単科大学、例えばスポーツ系の単科大学では、どれだけ就職に困っているか、卒業生がどこにも入れなくて困っているかという現状を見てみると、この世の中いつまでも早稲田大学という看板だけで入っていけるかどうかというのはすごく心配ですね。

そういうふうな危機感をあまり早稲田大学の先生方は持っておられなくて、この早稲田大学の名前が永遠に続くみたいに皆さんが思っておられるというところに危機感をすごく感じます。早稲田大学という名前が何か過大評価されているような、あちこちよその大学を見ないで回ってきた人にとっては、あまりそういうことを感じないまま来られたんでしょうけれども、よそは本当に、例えば私の前任校なんてのはもう近い将来に定員を半減させられるというような危機感を持っています。もうあちこちの大学というのは先を考えてやっている。だから、早稲田だって、慶応だって、いつまでも今の状態が続くとは思えないと思いますね。だから何かを考えていかないと、特にスポーツ科学科の場合は、スポーツさえできたらそれでいいという時代はとっくに終わっているんじゃないかな

という気はします。

**野嶋(司会)** 佐古先生、今のような意見についてどう思いますか。

**佐古** 僕はたまたま教務もやりましたし、それから全学審議会の委員として出ていることもあって、竹中先生がおっしゃったことは重要だと思います。僕自身も一度早稲田の外に出てまた来た人間ですから、そういう意味で大学全体として果たして本当にこのような運営でいいんだろうかと考えています。今の体制のまま続いていけるのかということはいろんな週刊誌でやられましたでしょう。取り上げられたことは細部とか数字は誤っていても、多分ほとんど事実だろうと私は思っているんですね。ですから、そういう部分での危機感はあるんです。では人間科学部の10年がどうであったか。また次の10年はどうなのか。これまでの10年は人間科学部は早稲田大学の中で一番新しい学部だと言って、それで済んできた。しかし、これから先あと10年ということになると、やはり今までのように一番新しい学部なんてもう言っていられないと思うんですね。

そうすると、早稲田大学の中で人間科学部の今後を考える、あるいは早稲田大学という看板を外してしまったところでの人間科学部の今後を考える必要がある。情報関係のインフラをもっと強化するとか、いろいろ考えなくちゃいけないことがある。しかし、一番大事なのは、僕が今学部長から宿題として与えられている事柄なんですけれども、発展していく、変化していく人間科学というものをどういうふうにして明示するか、提示するか、あるいは公開するか。そのための仕組みを考えて、今の学科制の中では公開できていない部分を、何とかこれを世間に公開したい。人間科学の成果を見てもらいたい。例えば立命館文学部のインスティテュートのような形でもいいですし、理工学部の複合領域みたいな形でもいいんだけど。

このことをご存じの先生方もいらっしゃると思いますけれども、人間科学部の最新の成果というものを常に出していく。それをもっと世界にわかりやすい形で提示して、常に変化していく部分をアピールしていく。それをまた学生も共有して、

自分たちのアイデンティティーをつくっていく。そのような努力をしていきたいなと思っているんです。何もしないで次の10年に行くのは無謀です。

## 人間科学部と臨床心理士

**野嶋(司会)** 門前先生、臨床心理士に対するニーズがマスコミとかなんかで非常に高いですよ。その辺について将来的な展望といたしましょうか、将来的な展望というとちょっと難しいかもしれませんが、要はあの現象は、今例えはじめが多いから臨時に各学校に週に何回かずつ配置するとかああいうような形で、一見見かけ上臨床心理学のニーズがあるように見えるんですけども、僕はそういうようなものは本当のニーズじゃないと思っているんですね。実際この人間科学部にたくさんそういう人たちが集まってくる現象がありますよね。それをその臨床系の先生方はどういうふうにとらえていらっしゃるのか。将来的にその戦力としてどうあったらいいのかとか、その辺はどうなんでしょうね。先生のお考えで全然構わないです。

**門前** 私はほかの臨床の先生はわからないので、私個人だけの話をさせてもらいたいと思うんですけど、私は、やっぱり臨床心理、心理療法をしていると、医者との区別も考えないといけないと思います。私自身はやはり医学ではないから、心理学領域であるから、私は病気を治すという関心は今ほとんどないです。病気を治すのは医者に任せればいい。それじゃ、心理学の臨床心理の連中というか、私は何をすればいいかという、特に人間科学部という場所に私を置いてくれているから、私は昔から生きざまとかそういうことを考えるのが好きだったんですね。だから、クライアントが来て症状を治してくれと言ったら、それは医者へ行ってくれと。そうじゃなくて、生きるということと一緒に考えたいという場合は一緒にやりましょうということで、私自身がやりたいのはそこばかりです。そういう臨床を本気で目指してくるなら、私はそういう学生は来てほしいと思います。

だから、やっぱり人間科学部であって、そういう意味でこの名前は私は非常に好きなんですけど

も、本当の臨床心理というのは人間科学部に置くべきであって、文学部に置くべきじゃない、あるいは教育学部に置くべきじゃない。ところが、ああいう資格制度では教育学部の教育心理がという、そういう心理学という名前がついているところが非常に優遇されているけど、全く間違っているんじゃないか。人間全体を見ないと、臨床なんて人間全体が対象だからということで、私自身追求していきたいのはそういう方向を追求していきたいと思っています。

竹中 将来的に、例えばうちの学生が臨床心理をやって、マスターを出て臨床心理士を取って、今みたいにスクールカウンセラーみたいな職場があれば、非常に卒業生としては行き場があるというふうに考えていいんです。しかし、将来的に見たら、スクールカウンセラーが学校に行き渡って、それほど学校での効果がなかったというふうになれば、世間は一遍にスクールカウンセラーに対して逆風となってきましたね。だから、そこら辺のことを考えると非常に危ういブームと言わざるをえませんね。

門前 私は、ああいう学校のカウンセラーというのは臨床心理の連中はやれないだろうと思う。あれはもっと教育の現場の人たちの仕事であって、特に医者じゃないですから、治療者ではないですから、そうするとやっぱり生きざま追求。いかにそういう心の開放をしていくかということの専門家というものを追求しないとイケない。いじめなんて何%か確実にあるんですから、あるいは自殺なんて何%か確実にあるわけですから。医者ががんを治せないのは許されて、臨床心理がそういうことが許されない、そんなことはないと思います。そこはきちっとやっぱり見ておかないとイケないという、そういう中でどう生きるか。厳しく人が生きるということが追求される必要があると思いますね。これは人間科学部だからこそ追求できる問題じゃないかなと非常に私は思っているんです。

野嶋(司会) 新しい方向性が示されましたこれからも議論が白越するところですが時間が残り少なくなりました、締めくくりを野呂先生、お願いできますでしょうか。

## わかりやすい人間科学を

野呂 学生の問題が後半ちょっと出たと思うんです。それにかかわって言いますと、やっぱり早稲田の名前でやっていくということが本当にこれからあとのくらいやれるのかという、そういう意味での危機感はずごくあると思うんです。ちょうどこれからの10年という2007年、いわゆる進学志願者年齢層が2008年が一番減少している。その中で恐らく出てくることというのは、入学志願者がもっと選んでくる。大学なり、あるいは学部なり、先生すら選んでくるということが予想されると僕は思うんです。そういう意味で言うと、人間科学とか、あるいは人間科学部というのはちょっと心配だなと思う。

それは何かというと、人間科学がよくわからないんです。人間科学って何なのかと志願者にはよく言われるじゃないですか。最近盛んにそれを理解する努力を受験産業の方でもやっているようですけれども、それは人に任せるだけじゃなくて、いわばわかる人間科学というかな、第三者、学生を含めて社会がもっと人間科学部というのをわかってくれないと、いわば適材がこの学部に入っていないことになって、それは問題だなと思う。例えば、ある学科では非常に女子学生の比率がふえているということで、適当な比率というのは恐らくあるだろうと思いますから、それ一つとってみても、急いで人間科学のアイデンティティーというものを、いろんな意味で、その学問の立場からというだけじゃなくて、学生の立場からも含めて考えなきゃいけないという気が切にするわけなんですけどね。

佐古 それからもう一つ重要なことがあります。野呂先生がおっしゃった言葉なんですけれども、受験産業とか進学情報を提供している業界の人たちは、何をモデルに人間科学部を考えているかというと、やっぱり大阪大学の人間科学部ですよ。早稲田大学の人間科学部も含めて、それらの業界においてはある種の整理はされつつあるわけなんですけれども、しかし、やはり相変わらず人間科学とは何なのかということがわかりにくいということは事実です。それは受験生だけではなくて、卒業

していく学生たちも、出ていって就職の面接に行ったときに、人間科学部というのはどういうところか、しかも自分たちが卒業していく学科、あなたの学科の名前だけでも、何をやっているんだと聞かれてわからない。説明できない。もうそのところでつまずいてしまうのが大抵の場合なんですよね。

ですから、それに対して例えば学科名はこれでもいいんだろうか、あるいはそれも含めた上でもっと人間科学というものを世間にわかってもらうという努力が必要でしょう。卒業生の苦労を考えれば、中にいる先生たちが旧態依然で今の名前のままでいいんだ、変える必要はないんだなどと考えているようでじゃ、私は先行き暗いと思いますね。野呂先生の発言に対する付言ですけれども。

野嶋(司会) 随分長い間いろんなお話をさせていただいてありがとうございました。ある程度の成果はあったと人間科学部を見てもいいような形で言ってくれる意見もあったし、かなり厳しい意見の方も多かったと思います。改善すべき点の具体的な指摘も随分あったとは思うんですね。しかし、今回のカリキュラムの改革が一つの典型例であったように、要は自分たちが自分自身を変革するパワーをどの程度内在しているのかと自問自答したときに、少なくとも一つはやり遂げているわけですから、我々は変革の作業に着手したことは確かです。これは永遠に続く道かもしれない。常に改革をし続けていく。そして、それもロングタームじゃなくて、かなりショートタームのリフォーム、あるいは常に改善の視点を持ち続けるという点。先輩たちが最初の枠組みをつくってくださったかもしれませんが、はっきり言いまして、僕はそこにしぼられる必要はないと思います。むしろ、やはり生き続けるための自己変革をやり続けていかなければいけないんだということ。しかも変革のサイクルは、我々が思っているよりももう少し短いものであること。

私の研究分野に、形成的評価(formative evaluation)という言葉があるんですけども、ちょうどこの言葉がそういうことを言っているんですね。カリキュラムをつくる時の過程の中で、どこの国でつくっても、だれがつくっても、つくった人

はみんな改革・改善を喜ばないんです。そして、本当に最後になって評価するから、これはオール・オア・ナッシング、捨てるのか残すのかということになってしまって、評価にならない。だから、いいカリキュラムをつくるためにはどうするのかということ、短い期間を切りまして、その都度評価をしてそこで改訂をしていく。それをフォーマティブという言葉で言っている。形成的評価というのはカリキュラム改革の一つのキーワードなんですよね。ですから、我々もまだカリキュラム改革の途上にある。その形成的評価をこまめにやっていきましょう。きょうは、随分実り多い議論ができたように思います。皆様方の真摯な座談会への参加に対し、心から感謝申し上げます。拙ない司会で進行の妨げとなったことも度々と思いますが、どうかお許し下さい。本日は、御出席ありがとうございました。

===== 了 =====